

# 冒険の鍵は足元に

アフリカの砂漠をバイクや車で走るラリー競技に出てから、早一八年がたちます。今から三〇年ほど前、フランス人のテイエリー・ザビーネが「冒険の扉をあけよう」と呼びかけて始まったのが、有名なバリ・ダカールラリー。パリからセネガルのダカールまでの約一万キロを走破するのですが、すでにエジプトのラリー経験があった私は、一九八九年に意気揚々と乗り込むもあつげなく惨敗。世界一過酷なラリーのゴールを踏むことができたのは、それから八年後でした。

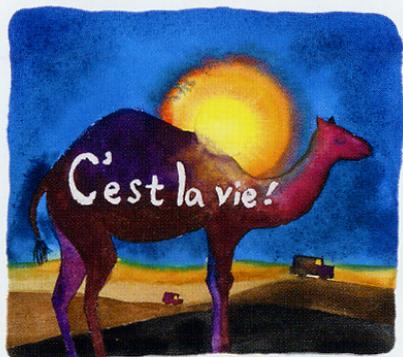
最初の頃、楽々と走っている（ように見える）ヨーロッパ勢の中で、「根性」と「忍耐」の塊だった日本人参加者たちは、どこか異様な存在でした。きっと私も浮いていたに違いありません。今思えば、一〇カ国を二〇日間で移動するという状態は、言葉も文化も自然も激変する馴染みのない世界だったでしょう。ところがヨーロッパ人にとつてのアフリカ諸国は、かつての統治国が多いためか、体力的にきつなくてもほとんど気分

はバカンス（に見えてしまう……）。

その「違いの本質」を知るきっかけとなったのは、報道陣として四輪でラリーを追った時でした。ゴール前日、サン・ルイの町でいつものホテル・デ・ラ・ポストに泊まった主催者や報道人たちは、まさに前夜祭ともいふべき大騒ぎを繰り広げていました。そこは飛行郵便屋さんたちや、一九三〇年にブラジルまで南大西洋横断を成し遂げたフランスの英雄ジャン・モルモーズ（サハラ砂漠での不時着はサン・テグジベリの小説の題材になったとか）の常宿で、天井には飛行機や航路がどんと描かれています。テイエリーがなぞったのは、まさにそのルート。初めてそれを知った時、リタイヤしても怪我をしても「それが人生さ」と言つて笑う選手たちのエスプリに触れたような気がしました。本当の強さ、孤独感、そして勇氣……。

ここ何年かの間に、世界も大きく変わりました。日本人も世界的な速さを持つようになり、優勝者も誕生。初めての参加者はうろたえるど

ころか「侍スピリッツ」としてその精神力を称えられるまでになりました。壁はどんどん低くなり、一九九七年に私も初完走しますが、それは、住んでいる富士山麓とアフリカの自然は同じと思ひ、旅するいつもの心（競わず認めあひ、畏れには踊るような心で挑む）で大地を走った成果でした。冒険の鍵は足元に転がっていたような気がしてなりません。



イラストレーション：栗岡奈美恵

やまむら れいこ／女性ライダーの先駆者として、バイク、車、旅関係の著述、海外ラリー参戦、講演、テレビ・ラジオ出演など、幅広く活躍。富士山麓での暮らしをつづつた近著「朝霧高原～風と暮らす」など、著書多数。http://www.fairytaile.jp/